
under water

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

u n d e r w a t e r

【Nコード】

N 6 2 7 2 V

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

水の下で、僕と彼女は。ちょっと可愛いお話を、ひとつ。

佐倉とプールに潜ってキスしたのは、たいした成り行きじゃなかった。

でも、キス自体をたいしたことじゃないと思っていたのは、実は佐倉だけだったことを佐倉は知らない。

僕には、たいしたことだったのだ。

だって僕は、ずっと佐倉にキスしたいと思ってたんだから。

だから、水からざばつと顔をあげて目を見合わせた時、佐倉が普通の顔してたのがっかりした。

そのピンク色の唇は、今僕の唇と触れたばかりだっていうのに。

大体、制服姿だって充分カワイイのに、そのカラフルな水着とお団子にした髪は反則だろう。

はしゃいで笑つてると、黒目がちの大きな瞳に光が反射する。

他のヤツが佐倉がカワイイことに気がついちゃうじゃないか。

部活のせいでくつきり小麦色に見えてた肌が実は白いことに、みんな気がついちゃうじゃないか。

でも、佐倉をバスタオルの蔭に隠しとく権利なんて僕にはないのだ。女の子も誘おうとプールの計画をした時に、佐倉に声をかけたのは、僕なんだから。

佐倉の剥き出しの肩を手で叩き、水面の下を指差した。

佐倉は悪戯っぽく笑って潜ると、水の中で目を開いて僕を見たんだ。頭を引き寄せるだけのタイムラグの鼓動。

誰か、気がついちゃうかな。

仲間たちがビーチボールに気をとられているうちに、早く！

水を挟んで柔らかい唇を探した。

プールからの帰りは、みんなでアイスクャンディーを齧りながら賑やかに歩いた。

佐倉のタンクトップで隠しきれない肩が、水着の部分を白く残して赤くなってる。

ショートパンツから伸びた足は、ソックスの形にツートンカラー。

「あ、松山のアイス美味しそ。一口頂戴」

手ごと握られてドギマギしてるのは、僕だけ。

佐倉はやっぱいつもの佐倉の顔をしていて、アイスクャンディーを齧る唇は何事もなかったかのように。

僕、バカみたい。

「松山、家まで送って」

みんなで別れ際、佐倉が僕に向かって命令した。

何で松山？周りが騒ぐ中、佐倉は平然と宣言した。

「あたし、今日から松山とつきあうから」

スタスタと歩き出した佐倉に慌てて追い付くと、佐倉はまっすぐ前を見ていた。

「つきあうって、勝手に決めるなよ」

「ダメなの？」

動揺した顔が、僕に向きあった。

「だって！男の子とキスしたの、はじめてだったんだもん！」

「・・・さっきまで、まるで平気な顔してたくせに」

「みんなに知られちゃうって頑張って普通の顔してたのに！松山、気がついてくれないんだもん！」

うわ、泣きそう。僕はこれに弱い。

元気のいい佐倉がたまに見せる顔。

「ごめん、今度は水に隠れられないけど」

アイスクャンディーの味を残した佐倉の唇は、水の中と違って暖かった。

f
i
n
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6272v/>

under water

2011年8月10日12時50分発行